

地域を元気にする施設、施設を元気にする地域 ～地域・市民・施設の共創～ 報告

日 時：平成 28 年 12 月 10 日（土）13:20～15:20

場 所：札幌エルプラザ公共 4 施設 2 階 会議室 1・2

内容

1. 開催概要

2. 環境中間支援会議・北海道 連続勉強会について

3. 事例発表

①美幌博物館「小さな町の大きな博物館」

美幌博物館学芸員 町田 善康氏

②地域と環境情報施設の共創による地域資源の活用 ～種差海岸インフォメーションセンター

NPO 法人 ACTY 理事長 町田 直子氏

4. パネルディスカッション

コーディネーター 北海道総合博物館 教授 副館長 大原 昌宏氏

パネラー 町田 善康氏、町田 直子氏

5. アンケート結果

1. 開催概要

タイトル	「地域を元気にする施設、施設を元気にする地域～地域・市民・施設の共創～」
日 時	12 月 10 日（土）きたネットフォーラム分科会 A
場 所	札幌市環境プラザ 会議室 1・2
参加者	30 名
ねらい	テーマは施設の地域貢献（「教育・普及啓発」「交流・活動支援」「観光・産業寄与」など様々な分野がある）。こうした地域貢献の事例を交え、市民が拠点施設を活用し、協働することによる施設や地域の価値向上の可能性を探る。
成果と課題	・行政から NPO、施設の管理・運営者、利用者に参加いただき、施設と地域の連携した取り組みについて紹介することができた。 ・講師との打ち合わせやディスカッションの進行など、運営に係る部分で調整不足があった。 ・参加者は限られるため、開催内容を Enavi ホームページにも掲載し、広く参考にしていただけるようにする。

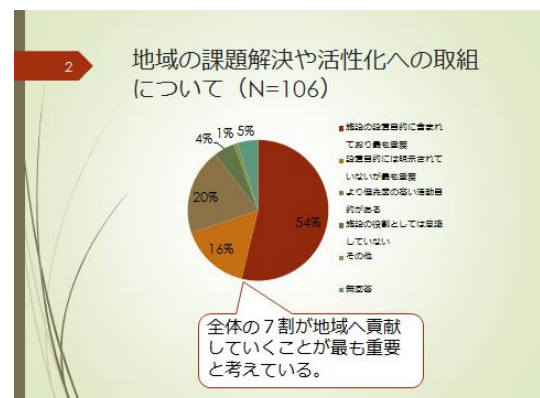
2. 環境中間支援会議・北海道 連続勉強会について

環境学習施設のような開かれた場があることで、地域の情報や人が集り、新たな活動、価値が生まれ、地域の環境を守り元気にしていくことにつながっていると考えられます。きたネット、札幌市環境プラザ、北海道環境財団、EPO 北海道の 4 者で構成する環境中間支援会議・北海道では、施設の当事者、関係者、利用者がそれぞれのニーズや期待を持ち寄り、こうした環境学習施設のもつさまざまな価値や魅力、可能性を考え、地域を元気にする力として今後も活用していくために、連続勉強会を開催することとし、その第一回目をきたネットフォーラムの分科会 A として本日開催しています。

そもそも、こうした施設の現状についてはこれまで調査されたことがなく、昨年度、中間支援会議・北海道の構成主体である、北海道環境財団が道内の環境学習施設を対象に調査を実施し、結果を Enavi のホームページでも公開しています。調査にご協力いただいた施設関係者の皆様には改めて、この場を借りてお礼申し上げます。

本調査から、実際に施設の多くが、地域の課題解決や活性化を重要と考えて取り組んでいることが確認できます。その内容は「普及啓発や保全活動に関するもの」から「交流の機会等の提供に関するもの」、さらに「観光・地域振興に関するもの」など多岐に渡ります。

本日の勉強会が、環境学習施設と地域が連携することでどんな可能性が生まれるのか考えるきっかけになれば幸いです。最後までお付き合いのほどよろしくお願いします。



環境学習等推進拠点の運営状況に関するアンケート調査の結果について

<http://enavi-hokkaido.net/modules/topics/index.php?page=article&storyid=29>

3. 事例発表

① 美幌博物館「小さな町の大きな博物館」

町田 善康 氏（美幌博物館 学芸員）

■ 博物館のイメージ

博物館の一般的なイメージとしては、「暗い」「古い」「ケースに入っていて触れない」「閉鎖的」「字がいっぱいで疲れる」「つまらない」ということが挙げられるが、現在は展示室も明るく、直接触れられるような展示物も用意され、開放的で、休息用の椅子等もあり、子どもも楽しめる仕掛けがある。博物館は「たくさんの実物がある」、「学習室等を備え、拠点となる施設である」「地域のことをよく知っている学芸員がいる」という強みを持っている。できることはたくさんあるが、暗いイメージを持たれていて、できることができていない「もったいない」状況にある。

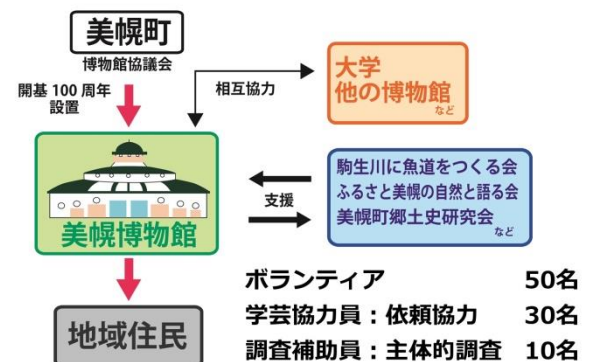
■ 美幌博物館の運営と博物館を支える応援団

美幌博物館について

- ・町の直営として運営（開基百年の記念施設として設立）
- ・設立目的：美幌町の文化、歴史、自然を残していく
- ・博物館協議会をもち、運営を評価する
- ・職員は9名、うち学芸員5名（正職員3名）であり、歴史、芸術、自然科学を扱うことを考えると適正数
- ・ボランティア、学芸協力員（依頼協力をお願いする準専門家）、調査補助員（主体的に調査ができる大学の先生・大学院生等）の方々をはじめ、地域のNPO、大学、他博物館とも相互協力関係を持ちつつ市民にサービスを提供

今日は博物館の取組のうち、美幌町の市街地を流れる駒生川に関する活動を紹介していきたい。

美幌博物館を支える応援団



■ 駒生川での取り組み

駒生川はアイヌ語で「チェオンネナイ（サケのいる大きい川）」と呼ばれていた。サケが遡上し、かつてはイトウもいたが、大規模な改修工事が行われ、落差工の影響で魚の数が減った。直線化も相まって、環境が均一化していった。

河川環境の復元には河川の再蛇行化など大規模なものもあるが、駒生川では、市民参加の元、小さなスケールでの復元にチャレンジしている。石や木を使って段差を減らす工事

を市民で実施するもので、この活動は地域の農家の方が主導し、博物館も協力している。

☆この様子は NHK でも放映されました

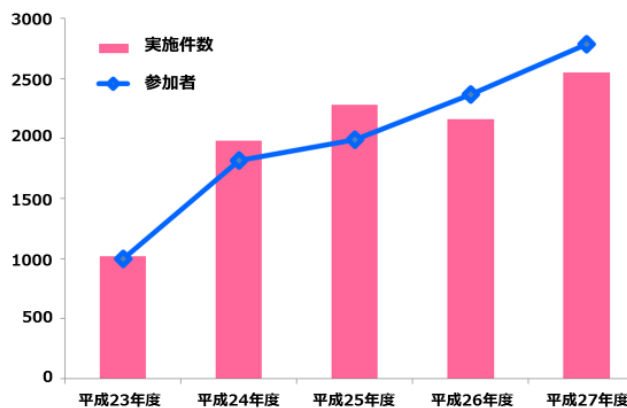
NHK ニュースおはよう日本

2012 年 6 月 14 日 放送「魚道を手づくりで取り戻す」

http://cgi4.nhk.or.jp/eco-channel/jp/movie/play.cgi?did=D0013771928_00000

■ 学校との連携

ほんとうの川の姿を知らないと、自然のことを考えることもできない。博物館では、体験を大切にしている。体験を通し正しい自然観を身につけ、自然はかけがえのないものであること、その自然が時間をかけて生み出されたことを知り、畏敬の念を持つことが重要。そのための役割を博物館も担っていると考えており、学校の指導要領に合わせた「利用の手引き」を作成し、体験学習のメニューを紹介している。



体験学習 実施件数・参加者数の推移

現在は年間 3,000 人程度の子どもたちに体験学習を提供。例えば、駒生川最寄りの小学校では、四季を通して下記のような取り組みを実施している

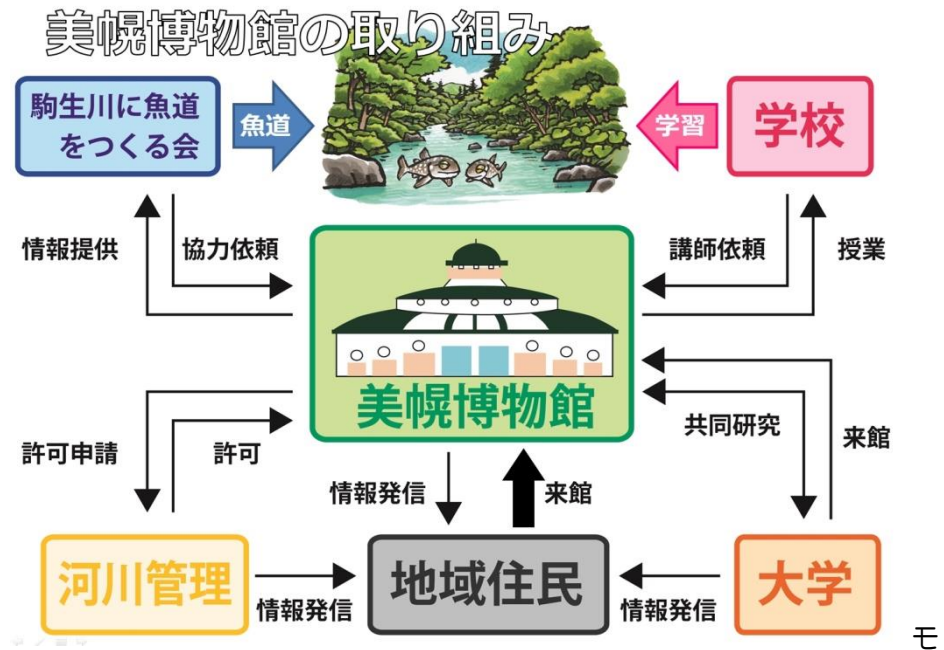
春：サケの誕生、川の構造

夏：生き物の観察

秋：サケの遡上

冬：川の中の微生物等の観察

このように、一つの川をテーマに「魚道づくり」「体験学習」を実施している。それぞれにおける博物館の関わり方は以下の通り。



このような成果を、展示を通して発信し、来館者増につなげている。また、河川管理者や大学からも情報発信があり、来館者増加につながっている。

■ 博物館に求められるもの

来館者数や経費で測られるのが博物館だが、本当にそれでよいのか。博物館は「みんなのための教育施設」であり、「地域の宝ものがある場所」である。例えば、北大植物園の中にある北海道大学博物館にはシマフクロウの剥製が展示してあり、ラベルを見ると 1881 年に札幌にシマフクロウがいたことが分かる。こういうことを学べるのが博物館のいいところ。ぜひ、美幌に来た方は、美幌博物館に足をお運びください。

美幌博物館 <http://www.town.bihoro.hokkaido.jp/museum/>

美幌博物館公式 Facebook ページ <https://www.facebook.com/bihoro.museum>

②. 地域と環境情報施設共創による地域資源の活用

町田 直子氏（種差海岸インフォメーションセンター運営協議会 事務局長
NPO法人 ACTY、株式会社ACプロモート）

■ 施設運営は地域活性化のツール

環境省が 2014 年に設置した「種差海岸インフォメーションセンター」を運営しているが、私たちは施設ができる前から、地域プロデュースを 20 年位しているので、今日は施設の話というよりも、「地域にどのように貢献していくのか」、「いかに外貨を落としてもらうか」、「どのように地域資源を利活用していくのか」をメインにお話したい。

肩書に「NPO 法人 ACTY」と「株式会社 AC プロモート」が並んでいる。NPO 法人 ACTY は種差海岸インフォメーションセンターの運営のほか、地域づくりを実施。事業のうち、利益の出る観光商品、お土産品やカフェ運営等は、「株式会社 AC プロモート」に移行して行っている。

インフォメーションセンターの運営については、「ハード面（ハコモノ）は行政が担ったので、民間はソフト面の充実を図る」という形で役割分担をしながら、お互いのミッションを共有し、協働している。NPO 法人 ACTY としては、インフォメーションセンター運営を「何回も八戸に来てもらい、お金を落としてもらい、地域経済を活性化させる」ツールと考え、漁師さんとのウニ獲り体験プログラム、海岸や山のトレッキング、周辺の飲食店等と連携してマルシェを開催するなど、ソフトの充実に力を入れている。



種差海岸インフォメーションセンター 外観

■ プログラム満足度 100%を目指す

現在 7 本の体験プログラムは、基本的に野外で実施。どれにも「食」と「地元の人」が絡んでいる。地元の人が講師となり、地元の人と交流し、地元のものを食べる。トレッキングにも、「地元の食材を使ったおやつでおもてなし」等の仕込みがある。

プログラムを作る際は、それぞれの地域の皆さんとの座談会を各所で 4 回ずつ開いて、何ができるか、どういうプログラムにするか…等々を話し合う。話していく中で、自分たちのプログラムとして考えてもらい、インフォメーションセンターを身近な施設として感じてもらえることができる。

プログラム終了後にはアンケートを実施。

一般的にアンケートは 5 段階の評価が多い（大変よかった・まあまあよかった・ふつう・

あまりよくなかった・よくなかった 等)。そして「アンケート結果の『まあまあよかった』と『大変よかった』を合わせて約80%が『よかった』なので成功といえる」としているのを目にするが、スタッフには「大変よかった」100%を目指さないといけないと伝えている。

「まあまあよかった」というのは、「少し良くなかったところがあった」ということ。そこを改善していかないと継続（リピート）はない、と考えている。

■ 地域資源＋付加価値 ＝ 魅力

地域の人達は自分たちの資源こそ日本一と思い、来てもらえたら満足すると考えてる。しかし、数多くの地域の中から選んでもらえるためには素材のまま、それだけでは難しい。そこで、NPO 法人 ACTY では、徹底的に付加価値をつけていっている。

よく「地域資源の発掘」という話があるが、「発掘で終わってはいませんか？」と思う。

地域資源を活用し付加価値をつけることで初めて魅力となる。

例えば「イカの水揚げ日本一」といった素材を売るのではなく、「自分がそこに行って何をするのか(やってみたい、食べてみたい、会ってみたい…)

のイメージを売っていかないと、選んでももらえないということ。そのイメージを目に見える形で発信することが必要と考え、プログラム開発を行っている。



夕焼けトレッキングの様子
このあとおいしいイカ刺しが待ってる

トレイルを歩きながら、漁師と漁をする、ヨガをする、サイクリングをする。行く先々で、地元の方によるおもてなしがある。これは地元の方々との密なコミュニケーションで信頼関係を築きながらプログラム化してきたもの。

開発したプログラムは、商品化・ビジネス化する。ビジネス化は非常に重要な観点で、よく「(補助金等の)お金がなくなったら継続できない」というのを聞くが、「お金があるうちにお金が生まれる仕組みづくりをする」ことが大事。



漁船に乗って漁を体験

このように、ある地域資源に付加価値をつけて継続的に販売することで、地域にもお金が落ち、継続し、人が来て、公共施設としても来館者が増え…という循環が生まれる。

NPO 法人としては、施設として実施するプログラムと商品化し販売するものには線を引きながら実施している。

■ 怒らない！ 体力と根気で勝負

地域ブランディングには、企画力、実践していく体力も必要で、また、Win-Win な経済効果を生み出す必要がある。それを支えるスタッフの育成は非常に重要となる。各人がどこまで頑張れるか、モチベーションがどこにあるのかを見極める必要がある。ミッションがはっきりしないと、モチベーションが続かず、やめてしまうことも。

企画運営に際しては「これやって」と丸投げにせず、ともに夢を持ち、目標を設定し、テーマを明確にし、企画と実践を行うこと、そして決して怒らないことが大事。

実は、冬の種差には誰も人が来ない。そこで、冬というネガティブ要素を、冬にしか体験できないこと、冬にしか食べられないもの、等「レアな体験」（ポジティブ要素）として提供する試みを始めている。地域資源はあくまで素材であり、スパイスを入れて料理をして初めておいしい料理になる。地域づくりとはそういうものだと考えながら、インフォメーションセンターの運営を通して観光開発を行っている。

ぜひ、八戸の魅力を満喫してください。お待ちしております。

種差海岸インフォメーションセンター <http://taneshashi.info/>

種差海岸インフォメーションセンター 公式 Facebook ページ

<https://www.facebook.com/taneshashikaigan.ic/>

NPO 法人 ACTY 株式会社 AC プロモート <http://npo-acty.jp/>

4. パネルディスカッション

パネラー

美幌博物館 町田善康氏

種差海岸インフォメーションセンター 町田直子氏

コーディネータ

北海道大学総合博物館 大原昌宏氏

大原) 今回のフォーラムは「地域を元気にする施設」「施設を元気にする地域」…「施設と地域がお互い責任を持つ」ということがテーマかと思うが、今回ふたりの町田さんにお話しいただいたことも、施設、市民、地域がどうお互いにかかわるかということだった。

美幌の町田さんは行政側の博物館にいて、地域の拠点となって、魅力をもっと活用すべきであり、その一つの事例が「魚道づくり」と紹介された。魚道づくりを市民と一緒にあって博物館が拠点となって行い、地域を元気にした、というお話をいただいた。

種差海岸インフォメーションセンターの町田さんからは、ハード（ハコモノ）を管理する行政と民間による満足度の高いソフトづくりについて、非常に実際的なお話をいただいた。

お二人の話を踏まえて、会場との質疑応答を行いました。
ご両人とも町田さんなので、以下「美幌」「種差」とします。

■ 施設の事業について

Q. たくさんのプログラムがあるが、参加者をどのように募っているのか？

種差) リピーターがとても多い。1年分のプログラムをまとめて申し込む人もいる。

参加者は一般募集で、インフォメーションセンターのホームページであったり、市の広報誌、地元紙の情報クリップで告知。情報を出したらすぐ定員になるのが現状。私たちが仕掛けてやっていくが、地元の方が前面に出るような感じで講師になっていただき実施するというスタイルを取っている。

美幌) 美幌で実施している学校の授業や魚道づくりは、依頼があってはじめて実施するもの。こちらからの働きかけはするが、特に学校にはガイドブックを作っているが、最終的に実施するかしないかの判断は学校の先生次第。基本は「待ち」の状態。

Q. プログラムの料金は？

種差) 公共施設のプログラムは一般的に安い。しかし、安いと民業圧迫となる。ガイドの

生活を圧迫してはいけなくて、なるべく高く設定している。

大原) 持続させるためにはビジネスにしないといけないところがあるが、逆にビジネスになるのなら、公的なところはどういう関わり方をするかという話かと思う。

私も現在公的なところにいるが、民間ができるところはどんどんビジネスにして、皆さん魅力的に動かせばいいと思っている。どうしてもお金が出せない部分を公が担う。

Q. 施設の人員体制に余裕がなく大変では？

美幌) 職員は紹介の通り。正規というのは役場の職員、非正規は役場の非正規職員。ボランティアは無償で交通費やお弁当代も出ない(保険には博物館の負担で加入)。学芸協力員はそれにお弁当代と交通費が出る。調査補助員は日当が出る。

種差) 常勤スタッフ3名。全員 NPO 法人 ACTY の雇用でインフォメーションセンター配属として勤務している。プログラム実施時は NPO 法人 ACTY のメンバーが2~3名補助に入る。なるべく、専門分野については専門の方に外注する方針。地元の方にガイド料を払う。自分たちはひとつの施設として、地域にいる専門家の方をうまくコーディネートし、みんなで参画していくという形式を取りたい。

Q. 満足度を高める工夫は？

美幌) 博物館の中で全員を満足させるのは難しい。郊外にある博物館に子どもは一人では来れない。来るために大人の手を借りる。来てもらわないと始まらないので、来る仕掛けを考えている。子どもが楽しむ姿を見て親が満足する、というのは確かにあるが、親も満足できるような展示物(「ここでしか見られないもの」等)を心がけている。

子どもが楽しめるものは大人も楽しいというものもある。

種差) いつ来てもできるプログラム(「ぶらっとプログラム」)を用意。自然のもの(貝など)を使うクラフト体験で子どもも大人も参加できる。トレッキングは毎週土曜日に実施。申し込み無しで参加できる。アンケートをガイドにフィードバックし、競争感をもたせ、クオリティを上昇させている。

大人に関しては施設自体よりもプログラムを目的に「今度何やるの」を見ていただき、子どもに関しては、ちょっと楽しめるものを用意。季節ごとのイベントも用意しており、ジャンボかるたなど大人も燃えて、正月の人出は大変多い。

大原) 「いつ行ってもできること」と、「そのときだけのスペシャル」の匙加減が大切ということですね

■ 施設と地域の連携について

Q. どうしてそんなに熱心になれるの？ 地域と一緒に取り組むにはどうすればいいの？

種差) 生まれも育ちも大阪。結婚して八戸に来た。最初は地域の人たちが地元を良く思っていないのかと感じたが、本当は地元愛が強く、大好きなのにそれが表現できないのだということがわかった。自分自身も、日々の暮らしの中で、食や、素晴らしい自然などに感動する。人と触れ合い、また一段と大きく感動する。その、同じ感動をみんなに伝えたい、というのが原動力。

地域の方と一緒に取り組む際には、ここまでやりたい、これを伝えたいというのが明確にあるので、そこに行き着くには、「自分の伝え方が足りないのかな」、「違って理解されているのかな」、「伝え方が違ったのかな、違う伝え方をしないと」、と切り替えながらやっている。

美幌) 美幌で市民とつながってやっているのだが、私が入る前から美幌博物館は市民と協働が多かった。その土台の上で、うまく一緒にやっていくための結びつきを強めている。

まず、自分が面白いと思うことをちゃんと伝えれば、面白いと思ってくれる人が見つかる。「面白い」を伝えることに博物館は長けている。

そのうえで、「参加しよう」というのは難しい。どんなに面白いと思っても参加できないこともある。そこで、しつこさも重要。「魚道を作る経験はいましかない！」

「授業なんて休んでもいい」などと誘う。そのうえで、例えば学生さんが困っているときなどは、自分は出向くようにしている。市民の方にも、その人がおもしろいと思っていることを一緒にやる。腰は軽く、いろいろな人とつながって、一緒にやれるといい。そういうことをやれる学芸員が美幌は多いので、比較的市民とつながってできているのかなと思う。

大原) 仕掛け人の熱意が高い。うまくいっている施設は仕掛け人がいるということ。

会場より) 地域の活性化は、よそ者、馬鹿者、若者、というのが必要と言われている。また、歴史文化があるなら、ルーツを調べるのも一つの地域おこしと信じている。

いろいろな角度から見て、物や町への付加価値が出てきて、次の展開につながるのでは。それをいかにまとめるのかが施設の役割かと思う。

会場より) 地域資源については、思い込みとか、声の大きい人の意見に引きずられるところがある。うまくいってないところは、ステークホルダーで集まって、各人がそれぞれの経験に基づいて話す。それぞれが違う経験をしているので、いつまでも意見が合

わない。「合意形成」以前に、お互いの情報を認め合う必要がある。情報というのはデータだけではなく、お互いがもっているものが言葉になっているか、そもそもの思いがどこから来ているかを探し当てて進めるのが重要。

大原)「議論、勉強の場を自由に作って下さい」という意見があった。自由に議論ができる場をどこに持っているか、何か言いたいことがあるときにどこが行けばいいのかが重要。

種差) インフォメーションセンターをやっていると、近所の人から、どこに行けばいいの？ わたしこう思うんだけど、と意見をもらうことはある。

そのたびごとに個別に対応するのではなく、新規にプログラムを作るときや、年度の変わり目などに、意見を出してもらうようにしている。そのような場でみなさんに意見を求めると、半分以上が苦情になる。コーディネート力は大切で、行政が進行を担当すると、行政に対する苦情が加熱し、行政の人は意見を言えなくなり「持ち帰って検討します」となる。そこは、自分たちは民間なので、聞くだけ聞いて、その中でできることを変換して行って、進むべき道を見据えながら、話を進行していく。

どの地域でも聞くと、ネイチャーガイド同士の間は難しい。牽制しあっていたり、客を取り合っていたりというのはある。それを個別にみんなきいていたらだめなので、ガイドが集まる会を年に 1~2 回設ける。それぞれの分野でそのような場を設け、そこから吸収して、何か一つ提供していく。コーディネートと切り替えは大事だと思う。

美幌) 博物館運営に関しては協議会という仰々しいものがある。町の有識者に意見をいただくことはしているが、なかなか広く市民から意見を吸い上げて運営に活かしていくことは出来ていない。そこは今後やっていきたい部分。

■ 施設の評価について

会場より) 利用者の立場で博物館やビジターセンターに多く足を運んでいるが、施設の人たちは何のためにここの職員なのか？ 自覚がないのでは、と感じることもある。展示に質問しても答えられない人も多々見られる。売っているものも間違いがあったり、地域の環境学習の施設として機能しているのか疑問に思うことがある。今のところ、怠けている施設について評価する仕組みになっていない。大学が評価をするのにいいポジションにいるのなら、北海道大学に動いてほしいと思っている。

大原) 大学はここ 20 年ぐらい、内部評価、外部評価に時間を取られている。総合博物館

も関係者、市民から評価を受けている（3年ごとに内部評価、6年ごとに外部評価）。北海道博物館は今年から始めた。

美幌）美幌は外部からの評価は協議会だけ。評価してくれる市民の人は好きで来る人なので評価は高くなる。もちろん北海道の博物館を総合的に評価してくれるような組織があったら、お願いしたい。悪いところは直したいと思っている。

会場より）怠けているところをいじめるのではなくて、せっかくあるのだから元気づけて、地域の環境学習施設としてイキイキして欲しい。勇気づけるためのアドバイスをする組織、意見を言ってくれるところがないといけない。いいことはいい、悪いことは悪い、という評価を出してあげたいので、北大に期待する。

会場より）博物館に興味があって、「評価のやり方」を標準化しよう、こういう評価をしていこうという共通意識がもてる方がいいと考えている。地域の博物館の役割はそれぞれ違うため、共通して評価しようとするとう無理がでてくる。

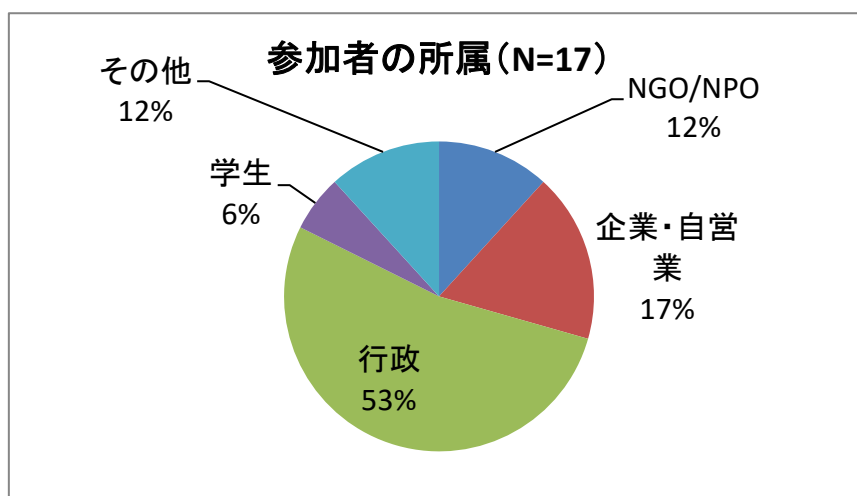
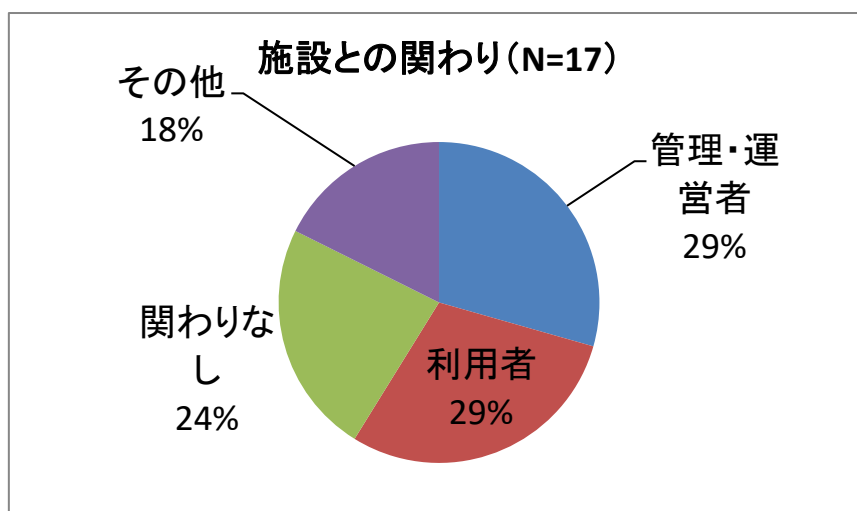
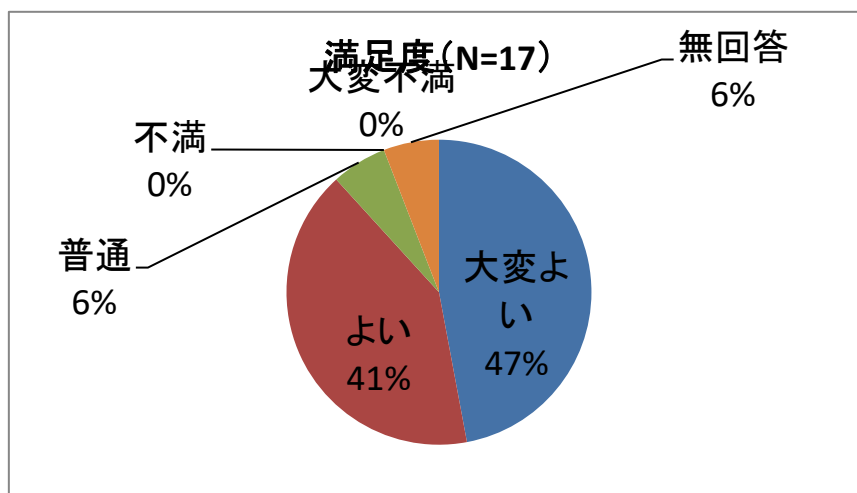
CSR レポートも、ISO26001 という国際標準になっている。これは、自分たちを評価するときに、最低限こういうステップでというのは決めておき、どう評価するかは自分たちで決める。そうすると、項目が違っていても、評価の方法は似ているので、比較ができるようになる。

地域の人からの「一生懸命やっている」という言葉だけではだめで、「一つ上の言語」、「共通の見方」というのを、概念として共通化させようという話。博物館施設が評価を受ける仕組みだけを共通化できると良いという意識がある。

■ まとめ

大原）地域資源をきちんと見つけよう、活用しようというお話があった。また、博物館が様々な意味でのプラットフォームとして大変重要で、可能性がある。行政と民間が win-win の関係を築くことは大変重要である。そして、これから人口が減り、地域が小さくなるので、そのときに博物館も評価を受けながら、見極めていくことが必要になる。その時には評価する際の標準化が重要になる。かつて東京学芸大学の伊藤寿朗先生が評価のためのチェックシートを作った。それを現在風に標準化すること、評価軸を作ることも大切と感じた。

5. アンケート結果



■感想・意見
意見や質問がもっと出やすいように、時間にゆとりを持たせて頂けるとよいと思いました。
お金があるうちに、お金になることをうみだす！という種差の町田さんの言葉が印象に残りました。美幌では魚道の取り組みに博物館がかかわっているのを自分の住んでいる地域で確認できてよかった
行政側としていろいろと学ぶことができました
行政の方々にも広く参加してもらえようになるとよい場になると思う
具体的なお話が聞けて参考となりました
施設利用について参考にしたい。魚道をつけたお話しがありました。体験談など参考になりました。
成功事例のみだったのでそれ以外の例も欲しかった。あとは事例数がもっとたくさん欲しかった
突っ込み不足
なぜ今回の講師を選んだのかを説明すると勉強会の狙いがもっとはっきりしたのはないかと感じました。ビジネスセミナーとしても通用する中身であったと思います。
博物館への批判があったが、今日び「なまけている」という例はそうないのでは？と思いきいていた。そんな中、山中先生の「標準化」の話、概念的でどこまで自分が理解できたかわからないが、方向性が把握できたと思います。
まず運営者が元気！
町田直子さんの話がパワフルで大変良かった。よく施設を建てて終わりというところが多いが、ソフト面の充実というのはまさに正論だと思う。でもいろいろ工夫していかないと魅力的なものにならないから難しいと思うが、そこを精力的にやっていますすごいと思う。
■今後取り組んでみたいこと
かなり小さなセンターなのでぜひしてみたいと思います。
環境調査
環境と子どもの遊び
施設側とのコミュニケーション不足あり
自然科学が地域に多数ある。ボラ活動としながら今少し深くかかわれないか探っている。天塩、松山湿原、があるが
地域資源の発掘と文章化
地域の歴史を学び、考える施設づくりをしてみたい。地域のオモローを吸い上げる場づくり
何か一緒に作りだすプログラムを考えてみたい
よく行政などで出前講座を行っているが、博物館やセンターも地元の小中学校などに出向いて出前講座的なことを実施していて、お客を呼び込むことにつなげてはどうか。
■今後取り上げて欲しいテーマ
学芸員を各地域に配置できないでしょうか。八戸町田さんの活動参考になりました。
施設と地域NPO、市民団体との連携
施設の活性化、人の育成
施設の評価
地域をまとめる行政マン
冬季の取り組みについてどのような事例があるのか知りたい